昭和47年 2 月20日発行通巻48号(毎日曜日発行) 昭和46年 2 月 5 日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

AE 朝日=ラルース

2/20
220円

48

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第 48 号

カラーページ

監修　小森　厚（多摩動物公園飼育係長）
翻訳　安井源治（早稲田大学教授）

私たちの仲間

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2−3　〒100 TEL 03−212−0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３−３　〒530 TEL 06−231−0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1−12−1　〒802 TEL 093−53−1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１−３−３　〒460 TEL052−231−8131

次号予告

２月16日発売



世界動物百科
49号　2／27

カラーページ

私たちの仲間

北京動物園に〝人気者〟登場

人工繁殖第１号の反修君が，北京動物園から姿を消したのが昨年の夏。以来，待望久しい人気者が最近登場し，子どもたちを喜ばせている。その名は〝小興〟。新しい人気者の姿を紹介しよう。



小興。四川省宝興県の生まれ。
推定年齢１歳数か月。性別不明。
目の輝きは野生の光
あどけなさは幼さのあかし。

野生オオパンダの赤ちゃん

写真と文　**南村志郎**

最近，北京動物園に新しい〝人気者〟があらわれた。名まえは「小興」ちゃん。全長約60センチ，年齢は１歳数か月の野生パンダである。

昨年の春，四川省宝興県の農民が，付近の山にたきぎをとりにはいったところ，竹林のなかにパンダのすむ穴を見つけた。穴の外にパンダの子どもがすわっているのを発見したかれは，親がまわりにいないので，そのまま家へ抱いて帰った。人民公社を通じて，政府に連絡したところ，北京動物園に送るようにとの指示。こうしてパンダの赤ちゃんは北京に移され，しばらく飼育されたあと，昨年の国慶節（10月１日）に一般にお目見えした。

「小興」ちゃんはまだ小さいため，雌雄の区別がつかない。動物園の専門家の話では，２歳を過ぎないとわからないのだという。まだ好物の竹葉も食べられず，もっぱら，米がゆ，窩頭（トウモロコシの粉でつくったまんじゅう），ニンジンなどで育てられている。

住居は以前，人工繁殖第１号の「反修」君が育てられた場所で（反修君は他の動物園に移転した），天気のよい日は１日じゅう戸外で日光浴を楽しんでいる。まだ小さいため，歩くにしても玉がころがるようで，手で顔を隠してみたり，舌を出したり，ときには足を上に向けてふて寝をしたり，そのしぐさはいかにも子どもらしくておもしろい。お目見えして日が浅いが，早くも中国の子どもたちの人気を集めている。

これで，北京動物園のオオパンダ館は，「反修」君の父母と「小興」ちゃんの３頭暮らしになった。■

（西園寺事務所）

私たちの仲間

48号……2月20日





コンニチワ！ 日本のみなさん。小輿です。
よろしくお願いしまあーす。
去年の春，北京へやってきました。
今は食べることと遊ぶことに夢中。
天気のよい日には外へ出て，
青空や雲とお話したり
大きな岩と力くらべをしています。
動物園のおじさんたちは，雄か雌かで，
頭をかかえているらしいけど関係ないよ。
恋人がほしくなったら態度で示しちゃうもの。





オオパンダ・4つのなぞ

編集部

世界の人気者――オオパンダ。しかし，その実際は人目にふれることもなく，いぜんとしてなぞにつつまれている部分が多い。珍獣，いやむしろ奇獣なのかもしれない。

歴史に登場しないわけ

パンダはかわいいうえに数が少ない動物だから，人気は増す一方である。しかし，それほどの珍獣でありながら，中国の神話，伝説，民謡，あるいは芸術作品に登場していないのはなぜだろうか。

古来，この動物はペイシュン（白熊）として知られていたが，歴史のうえでは，せいぜい禹の時代（推定4000年前）に四川省の山奥から貢納されたという話や，紀元前1050年ころに周の王侯が飼ったという『詩経』の記述，また，唐代の記録に雲南の竹林にすむ白いクマの話が出てくる程度である。古代中国の科学書である『天工開物』にも出ていないし，漢方薬の書に〝熊の胆〟の記述はあっても，パンダの話はどこにもない。

このなぞについて，いくつかの解釈をしてみよう。

その1．オオパンダの分布が中国文明の中心地から遠く離れた甘粛，雲南，四川といった中国西南部であること。しかも高山地帯で，自然の要塞ともいえるようなけわしい場所にすんでいるから，その存在を知るのは地元の人びとに限られ，遠い華中・華北の文明人はまったく知らなかったに違いない。

その2．地元ではよく知られ，好物のハチミツをとりに人里近くにまであらわれたというが，地元の人びとにとっては，ありふれたクマの一種としてしか理解されていなかった。したがって，朝廷への貢物にするほど貴重なものとは思えなかったし，むしろ，同じ地域にすむ，金色に輝くイボハナザルや，なめらかなターキンの毛皮などのほうが価値があるとされ，貢物に選ばれた。

その3．毛皮としては，上記のイボハナザルなどにくらべ，あの白黒の染め分けは，むしろ単純である。そのうえ毛がかたく，皮も厚い。しかも猟師のわなによって傷つけられることが多かった。

その4．宗教的に神聖視され，めったに狩ることができなかった。欧米人が近代になってはいってきてからも，殺したあとは清めの儀式が見られたという。

その5．シルクロードを往復する利ざとい商人によって運ばれることがあっても，その管理がむずかしく，途中で死んだりして結局飼育できなかった（これは今日の問題でもある）。

日本渡来説

昨年，美濃部東京都知事が訪中する際，日本の動物園関係者はこの機会とばかり，パンダの購入を働きかけ，ミノベンジャーを大いに期待したとか。

しかし，ここに奇説があって，オオパンダはすでに日本に渡来していたという。685年10月22日，唐王朝から2頭の生きた白いクマとその毛皮70枚が日本の天皇に送られたとのこと。これを，パンダがはじめて外国へいった特筆すべき事実だと主張する外国の学者がいる。

はたして，その白いクマがパンダであったかどうかは議論の分かれるところで，ホッキョクグマではという説もあ



はやく大きくなりたいんだ。だって，
大好物のタケがまだ食べられないもん。
あと3，4年で180センチ，150キロぐらいに
なるんだって。そうしたら，故郷のおかあさん，
思いだしてくれるかな。でも，さみしかないよ。
北京の子どもたちと友だちになったから。
日本の人たちとも，はやく知り合いになりたい。
その日を楽しみにしているよ。
じゃあ，またね。









る。後者の分布域は北極圏だが，モンゴルを訪れたマルコ・ポーロもホッキョクグマを知っていたくらいだから，古代の中国人もそれをよく知っていたはずだ。

逆に，ホッキョクグマの毛皮を70枚も集めたというのも信じられない話。あの遠いところから，どうやって集めたのか。やっぱりそれはパンダだったのでは……？

セックスチェック

〝小興〟ちゃんの紹介記事のなかに「性別が不明」とあるが，これに関して欧米のオオパンダにはこっけいな話がある。

戦前，シカゴ動物園にいたスーリンとメイメイ，ロンドン動物園のスンと，リエンホー（戦後）は雌とされ，女性名をつけられていたが，死後の解剖でいずれも雄と訂正された。一方，ニューヨーク動物園のパンディは逆の例であった。かれらはほとんど4歳半ほどで死んだため，死後の解剖でやっと性別が判明したわけである。有名なロンドン動物園のチィチィでも，しばらくは雄と考えられたくらい，この問題はやっかいなしろものらしい。

というのは，他の哺乳類でも，性器はふつう隠されていて，交尾の際，はじめて男性自身が確認されることが多い。交尾への信号は，性器の外見ではなく，肛門腺などからの分泌物などによって果たされている。

オオパンダは雄であっても，陰嚢はなく，性器が分厚い脂肪に囲まれている。成獣の解剖例では，外見上，男性を示すものはなく，去勢されたような状態であったという。

チィチィは2歳のとき雄と発表されたが，翌年から性行動を始め，背中を高く丸め，尾をもちあげ，臀部を飼育係の足にこすりつける典型的な雌の行為を示した（もっとも，欲求不満の雄にもときおり見られるが）。そこで5歳のとき，生殖器の拡大写真をとり，戦前の解剖図と照合したが，それでもまだ不明で，7歳になってやっと雌と確認されている。

はたしてシャオシンは雄か雌か……それが問題だ。

白黒模様の意味

オオパンダのからだの模様は，ひとつの芸術品に近い。その巧みに染め分けられた白と黒はなんのためだろうか。

第1に考えられるのは，保護色の機能。雪の多い岩場では，この白黒模様は絶好のカムフラージュになる。しかし，雪原や竹やぶでは，非常に目だってしまう。

第2は敵を警戒させる信号。パンダは弱い動物ではない。あごはじょうぶで，歯はかたい竹を嚙み砕く。からだも大きいし，力も強い。性質は攻撃的ではないが，決して臆病ではない。いったんことが起これば逡巡はしない。

だから，自分の優位をできるだけ相手に早くさとらせ，無用な争いを避ける東洋的な自然のマナーをもっているのかもしれない。

近縁のショウパンダが，太く長い尾の助けで樹上に生き残り，一方，尾が退化し，成獣になるとあまり樹上で生活をしない大きいパンダはその力によって生き残った。結局，中間のタイプが存在しないのは，パンダ類の適応放散として，第2の理由を一面で意義づけているともいえよう。

オオパンダの生息地で，これに匹敵しうる肉食獣は4種。ヒマラヤグマ（ツキノワグマ），ヒグマ，ドール，ヒョウである。前の2種とはすみわけ分布が違うから，かりにテリトリーを争うことはあっても，パンダの脅威になるとは考えられない。残る2種が，もしもパンダを捕食していたら，パンダはとおのむかしに絶滅していただろう。オオパンダが生き残ったのには，かれらを追いまわすことができなかったなんらかの理由があるに違いない。■　（田村記者）

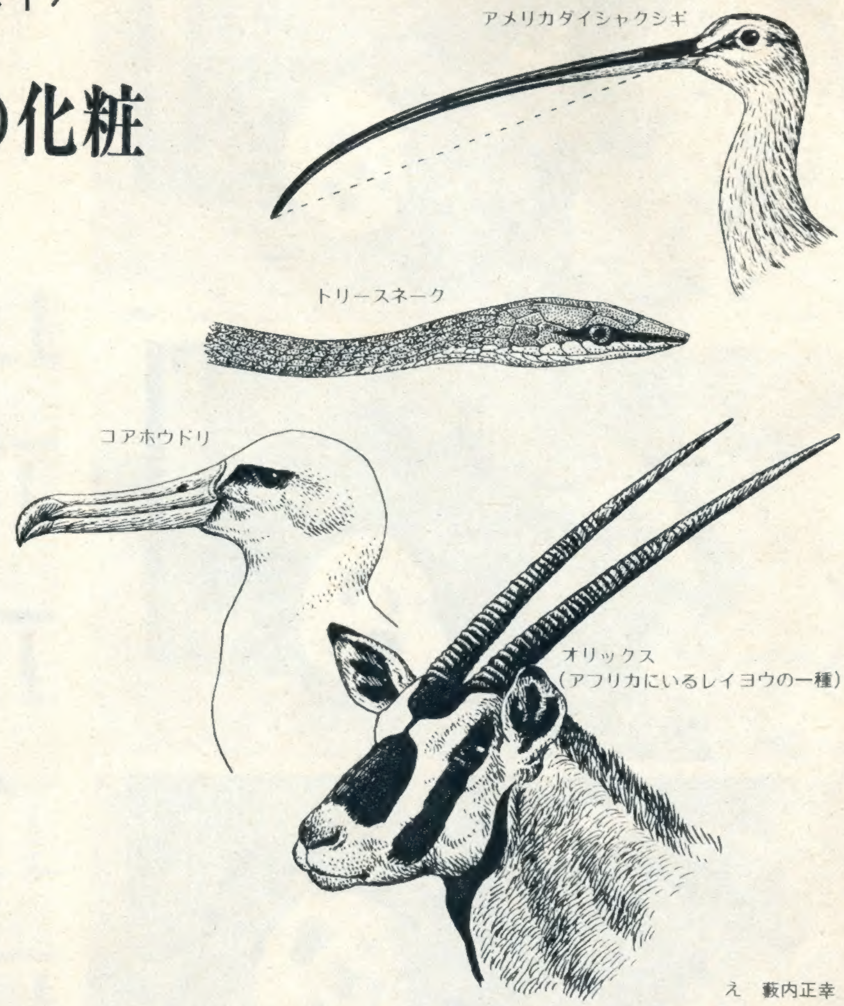
もうひとつの世界

30

グループ・5プラス1

アイラインの生物学〈下〉

照準器としての化粧



え　薮内正幸

“目を隠すアイライン”というのは，人間では化粧品の宣伝文句にもならないが，人間以外の動物では，たいへんにアピールしたらしい。とにかく，われもわれもとアイラインを入れることが流行した。これはもちろん冗談だが，実際にそんな感じがする。

このすじでもっと動物を見ていくと，アイラインには，目を隠す以上の効用もあるらしいことがわかってくる。たとえば，次号に登場するベイサオリックスという有蹄類の顔には，かなり複雑なラインが描かれている。その役割にはいろいろなものが考えられる。

1つはまず，“目を隠すアイライン”である。だが第2に，これらのラインは，この動物の頭を一見バラバラに見せる効果がある。黒いすじのほうが目だつので，動物の頭なのかどうかわからなくなってしまうのである。さらに第3の機能として，つのがアイラインのところからはえているように見える。その結果，つのは実際よりずっと長く見え，ライバル雄に対する威嚇，雌に示す貫禄という点では有利であろう。だからアイラインというのは，目を隠すばかりでなく，もっと多面的な効用をもっているのだといわれるようになった。

アイラインでなく，目のまわりを黒くふちどるアイシャドウも，アホウドリのようにまぶしい環境にすむ動物では，目がギラギラするのを防ぐためのものであることがわかってきた。先ごろ来日した野球団オリオールズの選手たちが，目の下を黒く塗っていたのは，まさにこの原理の応用である。アホウドリは何万年も前からこのことを知っていた。

けれども，最近また新しい考えが出されてきた。それは“ハントのためのアイライン”という説である。

多くの動物では，アイラインは目から鼻先までまっすぐにのびている。いくつかの例では，動物の視線がこのラインに沿って前方に向けられているのを示す写真がとられている。もしかするとアイラインは，動物が獲物にねらいをつけるときの助けになっているのかもしれない。

これがこの新しい説である。

もしそれがほんとうなら，アイラインは早く動く獲物を捕えて食う動物に，より多く見られるはずである。アメリカのフィッケンたちは，北アメリカ産の小鳥をえさによっていくつかのグループに分けてみた。飛びまわる小さな昆虫がえさの50パーセント以上を占めているグループを1番とし，順に2番，3番とグループ分けして，アイラインの存在を調べてみると，えさによるグループ分けとアイラインの存在とのあいだには，きわめて高い相関関係が認められた。

ひと口にアイラインといっても，いろいろなタイプのものがある。そして，それとその動物の獲物のとり方とは，うまくマッチしているとフィッケンたちはいう。

たとえば，アイラインはふつうは目からくちばしの先端へ向けて走っているが，アイサガモその他では，アイラインがぐっと前下方へ傾いて走っていて，口を開いたときに，目から下くちばしの先端へ向かう線に一致するのである。このような鳥は，獲物を見つけたら，まず口を大きく開き，アイラインと下くちばしの先端とを照準線にして，獲物にねらいを定めるのだろう。

シギなどの仲間は，砂の上の小さな無脊椎動物を捕えて食べるが，水辺でえさをあさるために肢が長く，それに伴ってくちばしも長く，しかも湾曲している。このような鳥では，アイラインは曲がったくちばしの先端に向かっており，アイラインとくちばしの先端を結ぶ線の上に獲物がくるようにねらいをつけ，さっとつつくのであると考えられる。

反対に，多くのサギでは，アイラインが前上方へ向かっている。サギは水面から水中の魚を捕えるのだが，光は水面で屈折するから，正確に獲物にねらいをつけることは，かなりむずかしいと思われる。

小学校で習うとおり，水面から見える獲物の像は見かけであって，真の位置は違うのだから。フィッケンたちの想像によると，上向きになったアイラインの延長上に獲物の像を固定し，そのまま突きかかれば，くちばしはみごとに真の獲物を捕えるはずであるという。

ヘビにはアイラインをもつものが多いが，木の枝にからだを巻きつけたまま獲物をとり，しかも，うっかり失敗したら獲物がはるか地上へ落ちてしまうというハンディキャップを負ったトリースネークでは，アイラインがもっとも発達している。

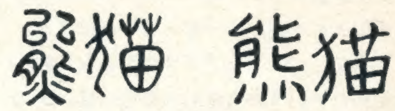
これらの動物では，人間と違って顔は細長く前方へのびており，動物は自分のアイラインを見ることができる。それが照準の線となって，うまく獲物を捕えられるのだというのである。

そうなると，アイラインはやはりハントのためのものだということになる。ただし，異性のハントでなく，食べるためのハントである。もっとも，人間の女の子のボーイ・ハントにも，食べるためという意味が多分に含まれているかもしれないが……。■

（Q）

漢字のふるさと　35

藤堂明保



熊猫（パンダ）　中国ではシュンマォという。全身が白くて黒毛の輪をつけている。白熊より体は小さくて頭が大きく，いかにもかわいらしい。雲南省・貴州省・西康など，いわゆる西中国の山地の特産である。

北京の西郊は，昔は広大な畑地であったが，今では町が伸びに伸びて，すっかり市街地となった。そこに大学や研究所などが，ゆったりとスペースをとって点在している。その一部に広大な「北京動物園」がある。

先年，北京を訪れたとき，午後のひとときが空いたので，この動物園に行ってみた。全体が自然公園といった感じで，門をくぐると，とたんにパンダの石像が目にうつる。花壇に囲まれた中に，愛嬌をふりまく白い石像なのである。「本物よりも，よくできていますね」と笑いながら，私は記念に写真にとってきた。

「熊猫」というのは，かつてチベット地方で，「熊」と「猫」を合わせたような正体不明の怪獣を呼んだ名である。それがよくわかってみると，なんとこんな愛らしい動物であったのだが，字だけは残っているわけだ。

しかし「百聞は一見にしかず」というが，竹のカーテンの向こう側を，世界中ではいろいろと取沙汰している。その中には，ずいぶんおかしな臆測もあるようだが，わかってみればパンダのようなこともあるのだろう。■



ブラックバック属 *Antilope*

ブラックバック

Antilope cervicapra

ブラックバックは，ブラックバック属に区分される唯一の種である。インドでは，神々の乗っている月の戦車を引く形で，星座のひとつに見立てられている。また，インドの詩人たちは，久しく，ブラックバックの優雅さと美しさを歌いつづけてきた。

俗に，レイヨウ，すなわちアンテロープ（Antilope）と呼ばれる動物は数多くいるが，学名に *Antilope* という属名が使われているのは，このブラックバックだけである。種名の *cervicapra* は，「シカヤギ」を意味するラテン語で，このほか，インドレイヨウ，インドカモシカ，ベアゾールレイヨウなどと呼ばれる。ちなみに，ベアゾールとは，胃石のことで，ヤギ，レイヨウ，ウシなどの腸内にできる結石をさし，解毒剤として珍重されたものである。

ブラックバックは，体長1.2～1.3メートル，尾長18センチほど。肩高は80センチ，体重はふつう37キロくらいである。胴体は，すらりとして細長く，臀部（でんぶ）のほうが肩よりも高くなっている。首は細く，左右から押されたような形に，平たくなっている。

目は大きく，鼻づらの両側には2条のはっきりしたみぞをつくっている眼下腺（がんかせん）がある。この眼下腺から出る分泌（ぶんぴ）物は，個体のなわ張りを示すサインポストにつけられたりして，重要な役割を果たしている。眼下腺は，とくに雄に発達しており，交尾期には，いっそう分泌が盛んになる。

ブラックバックは，レイヨウ類のうちでは珍しく，雄と雌の毛色が違っている。雄は，背とわき腹と四肢（しし）の外側が，ほとんど黒に近い茶色であるが，雌と子は，その部分が，茶色で，頭と背に，麦わら色のすじがはいっている。また，雌雄とも，腹部と四肢の内側，胸の部分，目の縁などは白である。

複雑なつのの形

つのは雄だけにあり，一般に40～50センチ，まれに，60～65センチのものがある。他のレイヨウ類にもみられるように，つのには，たくさんの環の節がある。しかし，ブラックバックのつのの先端は，いつも一定の方向に向いてのびていくのが特徴である。他のレイヨウでは，つのは，曲がりながらはえてきて，そのまま先端の方向が変わっていくのであるが，ブラックバックのつのは，曲がると同時によじれていくので，ひとつの方向に向かった，らせん形になって成長し，成熟した雄のつのは，3つから4つのねじれをもつようになる。左右のつのは，根もとでは，非常に近接しているが，先端では，30～40センチの開きがある。つのの色は，黒っぽい。ひづめも黒く，先のとがった形をしている。

ブラックバックは，インドおよび西パキス

ブラックバック。ブラックバック属。
雄のみにある，らせん形に巻いたつのが特徴。
インドレイヨウとも呼ばれる。
PH. W. SUSCHITZKY



ブラックバックの毛色は
年齢と性別によって異なる。
成熟した雄の背は、ほとんど黒色。
雌と子の背は，茶色。
腹だけはどれも、白い。

P.H.P. JACKSON PHOTO RESEARCHERS

タンの大平原に生息している。これらの平原は、ところどころに小さい灌木の茂みがあるが、毎年、乾期になると、草地も水もなくなってしまうので、ブラックバックは移動しなければならないのだが、この移動には、全体として、一定の方向はなさそうである。かれらは、数百頭にもなる群れをつくり、水のありそうな場所を求めて、移動する。

見渡すかぎりの大平原では、天然の隠れ場所がないので、群れをつくって生活するほうが、1頭だけ、あるいはつがいだけで暮らすよりも安全である。群れのなかの1頭が見張りの役を引き受けるので、ほかのものは、敵に襲われる心配をせずに、草を食べることができる。また、経験のあるものが、リーダーに選ばれ、群れを指導する。

このような群れのなかでの雌雄関係は、一夫一婦制ではなく、強い雄が、弱い雄たちを押しのけて、ハーレムをつくっているのである。これは、弱い雄にとっては不幸なことだが、強い雄だけが子孫をふやせることになるので、種の淘汰という点からみれば、非常に望ましいのである。

ジャンプは危険の合図

雌は非常に臆病である。たいていの場合、危険が迫ったとき、まっ先にこれを群れに知らせるのは雌である。雌が危険に気づいたときは、驚くほどの高さにとびあがる。すると、ほかの雌が、すぐにこれをまね、群れの全部に、この行動がひろがり伝わっていく。幾度かとびあがってから、ひとたびもとの姿勢にもどり、やおら全速力で逃走しはじめる。ブラックバックは、たいへん速いので、猟犬のグレーハウンドでさえも追いつけず、レイヨウ狩りのために特別に訓練されたチーターだけが、ようやく追いつけるほどである。

ブラックバックは、主として、大平原にはえている短い草を食べている。午後の、いちばん暑いころには休息している。

交尾期は、地方によって違うが、2月か3月である。眼下腺（がんかせん）の分泌（ぶんぴ）物が、生殖活動と直接の関係をもつようである。眼下腺は、ふだんは狭い割れめのような形をしているが、交尾期になると、これが開いて、強烈なにおいのする物質を分泌する。ブラックバックは、この分泌物を、灌木や石にこすりつける。これは、たぶん、異性をひきつける役をするものと思われる。この分泌物は、個体間の伝達のためにも大きい役割を果たしている。2頭のブラックバックがたがいに顔をなめあっているのがよく見られるが、これは、2頭のあいだの、尊敬、服従、性的魅力などを示している。雄はふだんは静かだが、交尾期になると、一種特別な鳴き声をたてる。雌は、発情しているときは、鋭い声を出す。

雄たちは、雌を獲得するために、激しい戦いをまじえる。成熟期に近づいている若い雄は、群れから除外され、別にいくつかの小さな集団を形づくる。強い雄に率いられたハーレムができると、そのハーレムどうしは、適当な距離をおいていて、たがいに交渉はしないが、さりとて全然離れてしまうこともなく、存在する。

雌は受胎後、およそ180日で子を生む。多くは、1産1子である。子どもは、母親の胎内でじゅうぶんに成育して生まれてくる。母親は、深い茂みに子どもを隠して授乳し、やや成長すると、群れに連れ帰って育てる。

ブラックバックは、インドでは、トラ、ヒョウ、オオカミの絶好の獲物である。インドでは、ブラックバックを捕えるのにおもしろい方法を用いていた。飼いならしておいたブラックバックの雄のつのに、たくさんの輪になった結びめのついた綱をつけ、野生のブラックバックの群れに放してやる。群れのリーダーの雄は、このよそものに対し、猛烈な戦いを展開しはじめ、雌たちまでが、これに加勢する。その結果、たくさんのレイヨウが綱の輪に肢（あし）をとられてしまい、あわててとびはね、はずそうとするが、輪は締まるばかり。ついに力つきて地面に倒れたところを、人間が捕えるというわけである。

今でも、ブラックバック狩りは、インドでいちばん好まれる狩猟のひとつであるが、銃を使うところがむかしと異なる。生けどられれば、ブラックバックの子どもは、飼いならされる。おとなしいので、主人にかわいがられること請けあいである。ただ、成長すると、発情期にはあばれるので、このときは、いらだたせないほうがよい。

インドでは、以前、ブラックバックのつのを使って、弓や投げ槍をつくっていた。その腸にできる結石は、胃石とか牛黄とか呼ばれ、さまざまな病気にきく特効薬として珍重されている。



ブラックバック。ブラックバック属。
危険を感じると、まず何回かとびあがり
それから全速力で逃げる。
走るのは、非常に速い。
PH. P. JACKSON–PHOTO RESEARCHERS

ディクディク属　*Madoqua*



レイヨウ類のうちで，いちばん小型の種類のひとつに，ディクディク属がある。この仲間は，どれも，非常にスマートな形をしており，姿も似たり寄ったりである。つのは雄だけにあり，小さく，細く，まっすぐで，先がとがっている。

つのの根もとには，環，あるいは半環の節がある。頭は丸く，種によって程度差はあるが，鼻先は長くのびていて，大きな目をしているのが特徴である。

この属の動物は，習性も形態も似通っていて，現在のところ，５種に分けられていることが多い。エリトリアディクディク，アカハラディクディク *Madoqua phillipsi*，ヒメディクディク *Madoqua swaynei*，コルドーディクディク *Madoqua cordeauxi*，エルランガーディクディク *Madoqua erlangeri* である。

このほかに，これらの動物に近縁な種にキルクディクディク *Rhynchotragus kirki*，および，ギュンターディクディク *Rhynchotragus guentheri* があり，**ギュンターディクディク属** *Rhynchotragus* として分類されている。かれらは，鼻先がとくに長くのびているのが特徴である。



ギュンターディクディク属の子。
鼻先が長くとがっているのが特徴。（上）
PH. N. MYERS

ディクディク属。
ほとんどが群れず，つがい単位で生活する。（下）
PH. P. PFEFFER



エリトリアディクディク

Madoqua saltiana

エリトリアディクディクは、肩高わずか35センチ、体重は3.4キロほどしかない。雄には2本の、先のとがったつのがある。頭の、つのとつのとの間にある毛は、かたくて立っていて、あたかも、つのが3本あるかのように見える。耳は非常に長い。

からだは、ずんぐりしていて、尾は小さく、短い毛でおおわれている。四肢(しし)はごく細い。ひづめは細長く、先がとがっていて、第2、第5指である側蹄(そくてい)はごく小さくてほとんど見えない。

毛色は全体に薄く、霜降り模様になっている。1本1本の毛は、根もとのほうが明色で、先のほうが暗色をしているためである。つの、ひづめ、眼下腺(がんかせん)は黒い。眼下腺からは、強いじゃこうのにおいを発する、ねばねばした物質が分泌(ぶんぴ)される。

エリトリアディクディクは、エチオピアのエリトリアとアビシニアのあたりに、かなりの数がすんでいる。

ケニア、タンザニア、アンゴラ、およびアフリカ西南部の森林地帯には、先にあげた他の種が生息している。大型のレイヨウ類ならば、樹木がおいしげった、こうした密林には、とうていはいれないであろう。しかし、ディクディクのような小型のレイヨウは、楽々とはいることができ、どんなところにでも通路をつくってしまうのだ。

ごく小型なレイヨウ類の大部分がそうであるが、ディクディクも、群れをつくらず、つがいの単位で生活しており、母親の世話が必要な間は、子どもは両親といっしょにいる。かれらは草木の密生した茂みにすんでいる。

好きな食べ物は、草、柔らかい葉、とくにミモザの葉がお気にいりで、芽も食べる。すんでいる茂みから少し離れた茂みのなかに、小さなくぼみを掘り、そこへウサギのふんにそっくりな排出物をためる。

ディクディクのうち、ある種のものは、しばしば川ぶちに出かけていって水を飲むが、多くの種は、水の欠乏にきびしく耐えて、数か月も水なしで生きることができる。エリトリアディクディクもそうであるが、雨露や、植物が含んでいる水分だけで、生きていけるのである。

ディクディク属の種は、今では、多くが法律によって保護されているが、カラハリ砂漠にすむブッシュマン族は、おそらく迷信からであろうが、この動物を殺さないし、また、バントゥー族は、これらの動物の肉を食べると歯が抜けると信じている。しかし、ピグミー族は、平気で食べてしまう。アフリカの一部では、ディクディクが飼われているのをよく見かける。パン、ニンジンなども食べるし、塩が大好きである。おとなしいので、飼っても危険はない。

ディクディク属の子。
となりに並んだカエルと比較すれば
その小ささがよくわかる。(上)
PH. C. A. GUGGISBERG

オリビ属　*Ourebia*

オリビ属は、ディクディクなどと同じ小型のレイヨウである。3種が数えられるが、いずれもよく似ており、学者によっては、これらの種を、以下に述べるオリビ1種の亜種とみることも多い。

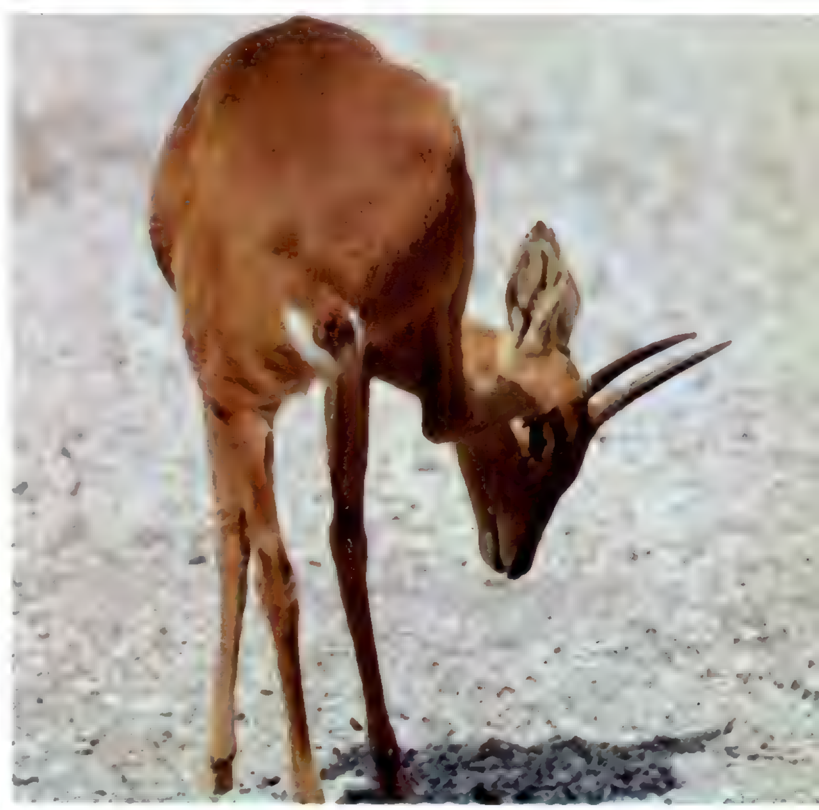
オリビ　*Ourebia ourebia*

オリビは、体長が、もっとも大きいもので1.1メートルくらいあり、肩高は約60センチである。毛色は、からだの上部で淡黄褐色、ほかの部分では白い。

つのは雄だけにあり、小さく、ほぼまっすぐで、長さは8～12センチである。尾は15センチを越えることはない。手根部と尾の端には、黒い毛のふさがある。

オリビは、アフリカ大陸のサハラ以南の全土にみられる。他の大部分のレイヨウ類と同じく、開けた平野が好きだが、人間を恐れず、人家に近づくこともある。比較的しのぎやすい、朝と夕方に草を食べ、日中の暑い時間は休んでいる。

一般に、つがいか小さな家族単位で生活している。危険なことがあると、まず、丈の高い草のなかにひそみ、敵があと数メートルと迫って、はじめて逃げだそうとする。いった



オリビ。オリビ属。
アフリカのサバンナにすむ淡黄褐色のレイヨウ。
かたいひづめは、頭をかくのにも便利だ。(下)
PH. J. P. VARIN-JACANA

ん逃げはじめれば、すばらしい跳躍（ちょうやく）で、全速力で走る。このとき、尾をぴんとあげるが、これは、仲間への逃げろという合図なのである。

妊娠（にんしん）期間は、約7か月で、1産1子。出産の時期は、9月から12月の間である。10年ほどを生きる。

オリビの肉は、おいしいと評判が高く、乱獲されて減ってはいるが、今のところ、絶滅のおそれはない。

クリップスプリンガー属

Oreotragus

クリップスプリンガー

Oreotragus oreotragus

クリップスプリンガーは、クリップスプリンガー属に分けられる唯一の種である。ほかのレイヨウ類とは、からだつき、生息地、習性などが、かなり異なり、シャモアなどのカモシカ類を思わせるところが多い。系統分類的には、オリビ属に近い種である。

クリップスプリンガーは、さしずめ小さいシャモアといったところである。肩高は50センチを越えず、体長は90センチ、体重は12～16キロである。からだはずんぐりとして、首は細く、頭は幅広く丸みを帯びている。四肢（しし）は短くがんじょうで、尾は退化してい



オリビの雄と雌。オリビ属。
ふつうつがいですむ。
危険が迫ると、草の茂みにひそんでいて
敵が真近にくるや、とびだして逃げる。
PH. E. BEL G. VIENNE JACANA

て、きわめて短い。耳は幅が広くて長い。目は大きい。

ひづめは幅が狭く立っていて、後ろ側がまるく削られたようになっているため、ひづめの先端にだけ体重をかける形になっている。全身にあらい毛が密生していて、全体の色は、オリーブがかった黄色で、明るい黄色と茶色の霜降りになっている。腹部と四肢(しし)の内側は白い。雄にはつのがある。黒くてまっすぐなつので、長さは10センチほど、基部には環の節がある。

生息地は、アフリカの山岳地帯で、標高600〜2500メートルほどの岩石の多いところに好んですむ。その生息地域の北限は、エチオピア、ソマリアである。肢(あし)のじょうぶなことでは、シャモアに劣らない。

クリップスプリンガーは、オリビと同様、つがいで生活する。そのほか、つがいとその子どもから成る3、4頭、あるいは、一時的に2組のつがいが共同で暮らしているのも、よく見かける。天気のよいときは高い所に登り、雨が降りつづくときは、谷間に降りてくる。

ミモザの葉や、高山の植物などが常食で、早朝や夕方に食べる。水は、わずかしか飲まない。日中はトウダイグサの茂みや、背の高い草むら、岩塊のまわりなどにいるので、姿を見ることはむずかしいが、明けがたと日没時には、空気が澄んでいて、クリップスプリンガーが、この時間、高い岩の上に登る習性があるため、遠くからでも、その姿を見ることができる。

非常に感覚が発達しているので、危険が迫ると、すばやく逃げはじめる。けわしい勾配の岩地を、岩棚から岩棚へととび、深い谷の縁を走り抜け、どんなところでも自由に登ったり降りたりする。信じられないほど身軽で、どんなに狭い岩の端にも、止まっていられる。坂を登るときの四肢の強さは、驚くほどである。肢は、さながら鋼鉄のごとく、筋肉のひとつひとつが、むだなく動くようにみえる。ここの岩の上にいたかと思うと、次の瞬間には、あちらの草の茂みに姿を隠してしまう。こちらが、あっけにとられてしまうような速さで走る。敵の攻撃範囲から脱出するには、数秒もあればじゅうぶんなのである。

交尾期は、2月から6月のころで、期間としてはかなり長い。妊娠(にんしん)期間は、およそ、214日で、子どもが生まれるのは、9月から翌年の1月にかけてである。1度に、1頭の子どもしか生まれてこない。

その肉はおいしく、その皮は、アフリカの山岳地帯にすむ人びとに、パン袋の材料として使われている。



クリップスプリンガー。クリップスプリンガー属。
切りたった断崖も平気で通り
小さいひづめで、岩の上に身をささえる。
アフリカのシャモアともいうべきレイヨウ。
PH. J.-P. VARIN-JACANA





ジェレヌク属 *Litocranius*

ジェレヌク *Litocranius walleri*

ジェレヌクは、ジェレヌク属に分けられる唯一の種で、特異なからだの形をしているが、多くの点で、ガゼル属の動物に似ている。生息地は、ガゼル属とほぼ同じであるが、ガゼル属が草を主食とするのに対して、ジェレヌクは、木の葉を主食とし、一種のすみ分けといえる。

ジェレヌクは、首と肢(あし)がおそろしく長いので、キリンレイヨウとあだ名されている。その優美さとスマートさは、古い時代から定評がある。

体長は、約1.5メートル、尾長23センチ前後、肩高90～100センチほど、体重は43～50キロある。首は非常に長くて、キリンを思わせる。雌はつのがないので、いっそうキリンに似てみえる。鼻先は、細長く突きだしており、頭は幅広く、扁平(へんぺい)である。雄だけにあるつのは、中太で、かなりがっしりしている。雄の首は、雌よりも太めである。肢は細く、非常に長い。側蹄(そくてい)は上のほうにあって、ほとんど見えない。

ジェレヌクは、アフリカ東部、ソマリアからケニアにかけて生息している。これらの地域は、雨がほとんど降らず、植物は主として、イバラであるが、量はわずかである。ジェレヌクが、このような土地で生きていけるのは、新陳代謝(しんちんたいしゃ)に必要なエネルギーが、ごく経済的に使われるためで、たとえば、水が少ないときは、朝露や、食糧のイバラに含まれている少量の水分をとり、余分な水分は排出しない。

大集団を養うには、環境があまりに貧しいので、ジェレヌクは、小さな群れをつくって生活している。幸いなことに、ジェレヌクを常食にする肉食獣は少なく、とくに大きな群れをつくる必要もない。ジェレヌクは食性も、キリンによく似て、主としてアカシアの葉を食べる。このとき、ジェレヌクは、からだを立てて、前肢(ぜんし)を上にのばして枝にかけ、さらに長い首をのばして葉を食べる。

交尾期になると、眼下腺(がんかせん)の働きが活発になり、雄と雌がたがいに顔をなめあうのが見られるが、これは、たがいの感情を伝える動作なのである。ハーレムをつくるために雄どうしはつのを低く下げ、猛烈な戦いをするが、これは、一種の儀式で、殺しあうまでにはいたらない。

ジェレヌク。ジェレヌク属。
からだを立てて、アカシアの枝に前肢をかけ
葉を食べているところである。(上)
PH. N. MYERS–PHOTO RESEARCHERS

ジェレヌクは
その長い首から、キリンレイヨウとも呼ばれる。
アフリカ東部の、乾燥した地帯にすむ。(下)
PH. S. TREVOR–PHOTO RESEARCHERS

ディクディク属。
雄だけにつのがあり、左右のつのの間には
3本めのつのともみえる冠毛がある。
目の下の黒い眼下腺がよく見える。(右)
PH. F. BEL–G. VIENNE JACANA





川を渡るオグロヌーの群れ。浅いところは歩いて，深いところは泳いで渡るが，隊伍をくずさずに，まとまって行動する。つねに，柔らかい草を求めて移動しており，このような大群は，何頭かの複数の雄に率いられている。

PH. D. PATTERSON





「おかあさん，あの変な動物はなんていうの？　さっきからぼくのあとをついてまわって，とても気味が悪いんだ。ぼくの顔を見ては，ウシだといって，おや，ウマにも似てる，なんていうの」「あれはね，ヒトという恐ろしい動物なんだよ。いっておやり，ボクはウシでもウマでもない，オグロヌーなんだって」

PH. S. TREVOR–A. DENIS PRODUCTIONS

ディバタグ属 *Ammodorcas*

ディバタグ *Ammodorcas clarkei*

ディバタグは、ディバタグ属に分けられる唯一の種である。多くの点でジェレヌク属に近く、ジェレヌクに似ているが、より小型である。

体長は、1.2メートルほど、肩高約80センチ、体重は30キロ程度である。尾は、ジェレヌクよりずっと長く、約35センチ、歩くときはこの尾を垂直に立てるという、おもしろい習性がある。雄だけにつのがあり、リードバックのつのに似て、前方に向いてたわんでいる。

ソマリアの、乾燥した丘陵地帯の東部に生息している。水を飲まなくても生活できるが、出産は、授乳する母親の栄養状態がよい雨期に行なわれる。妊娠（にんしん）期間は、約1年で、したがって交尾も前年の雨期に行なわれることになる。

ディバタグは、つがい、あるいは1頭の雄に率いられた4～8頭の小さい群れで生活する。主食は木の葉で、食べ方は、ジェレヌクに似て、長い首をのばして、あるいは前肢（ぜんし）を枝にかけて食べる。

ローンアンテロープ亜科 *Hippotraginae*

アフリカ大陸の中部や東部の大草原、および、アラビアやその付近には、形態からみても、習性からみても、かなり似通ったいくつかの種のレイヨウが、数多く見られる。これらは、総括して、ローンアンテロープという亜科に入れられている。

このグループのレイヨウ類は、からだは大型で、つのはふつう雌雄ともにあり、長さもほぼ同じである。しかし、リードバック属やコーブ属などは、雌につのがない。首は短く、たくましく、尻が肩より低いものも、かなりある。眼下腺（がんかせん）は、いずれも発達している。

かれらは、開けた平野に群れをなして生活しており、筋肉組織が発達しているので、長時間の疾走もできる。しかし、かれらもまた、大型の肉食獣のえさとなることが多い。

以下に、この亜科に属するオグロヌー属、ヌー属、ハーテベースト属、ダマリスク属、アダックス属、オリックス属、ローンアンテロープ属、コーブ属、リーチュエ属、リードバック属などの動物のいくつかを順をおってとりあげてみよう。

オグロヌー属 *Gorgon*

オグロヌー *Gorgon taurinus*

オグロヌーは、オグロヌー属に分けられる唯一の種である。ウマ、レイヨウ、ウシのいずれにも似ているという奇妙な動物である。からだつきとたてがみからはウマ、2つのひづめのある細い肢（あし）からはレイヨウ類、頭の形とつのからは、ウシをほうふつさせる。その行動にも、ウシ、ウマ、レイヨウを混ぜたような習性がみられる。

頭はほぼ矩形で、ウシに似る。つのは、雌雄ともにあり、額の中央部から出ている。ローンアンテロープ亜科のレイヨウとしては、まったくの例外なのだが、つのには環状の節がない。左右のつのは、根もとでは近接しているが、先へいくほど左右に分かれ、その先端は上へ曲がる形に開いていく。

眼下腺はないが、かわりに涙腺のふくらみがみられる。尾はウマのように長い毛のふさをもち、豊かなたてがみが首と背を飾る。

オグロヌーは、もっとも大型のレイヨウの一種である。体長は1.5～2.0メートル、尾長40～50センチ、肩高は最大のもので1.3メートルほど、体重は、成熟した雄で230～275キ



オグロヌー。オグロヌー属
雌雄ともにつのをもち、ふつうは5～15頭で群れて、シマウマなどともいっしょにいる。
PH. MYERS－AERIQUEPHOTO

日ほどある。

オグロヌーの毛色の基調は、かなり暗い灰白色で、その上に明るい斜めの縞がくっきり浮きだしている。たてがみは黒褐色である。

アフリカの東部と南部に生息する。

5～15頭で群れをつくっているが、これらの群れがさらに集まって共同生活をするので、その数は100頭を越すことがある。この大群は、雨のあとにはえる柔らかい草を求めて大移動をする。さながら民族の移動といった感じである。小さい群れは1頭の雄に率いられているが、大きい群れは何頭かのリーダー格の雄がいるようである。リーダーの雄は、ある年齢に達するとその座を追われ、若い雄たちが、かわってリーダーになる。追われた雄たちは、それぞれに、1頭で暮らすか、あるいは自分たちだけで小さい群れをつくる。

なにか不安なきざしがあると、たとえば、遠くにライオンのにおいをかぎつけたときなどは、奇妙なパントマイムを始める。尾をぴんと立てたり、頭をもたげたり、ひづめで地面をかいたり、おどすような態度をしたり、つので土を掘ったりするのである。しかし、いったん、風向きが変わるなどして、危険なきざしがなくなると、再び、のんびりと草を食べはじめる。

オグロヌーは、好奇心をそそるもの、たとえば、人間に出くわすと、平気で近づいてきたりする。シマウマや、他の種のレイヨウともいっしょにいるのがよく見られる。動きは敏捷で、ライオンに襲われたりすると、非常に勇敢に戦う。これは、雄も雌も同じで、このようなときに発するうなり声は、まるで雄ウシのようである。ライオンは、オグロヌーを襲うときは、1頭でいるときをねらうといわれる。

アフリカにすむ大部分の反芻(はんすう)動物がそうであるが、オグロヌーは、朝と夕方に草を食べ、昼間は木陰で、ウシそっくりの格好で休息する。常食は草と灌木である。

交尾期は6月ころである。8か月から9か月の妊娠(にんしん)期間を経て、1頭の子を生む。子は、母親の胎内でじゅうぶんに育って生まれ、数日後には母親について、どこへでもいく。母親は、7、8か月の間、授乳するが、子は、生まれて2週間もすれば、草を食べることができる。

雌は、満2歳になる以前に交尾し、子を生む。乳頭は4つ。およそ16年ほどを生きる。

ヌー属　*Connochaetes*

オジロヌー　*Connochaetes gnou*

オジロヌーは、ヌー属に分けられる唯一の種である。オグロヌーよりは小型で、肩高は1.2メートルほどである。つのも、オグロヌーでは、横に幅広く振りだしてから、上に曲が



オグロヌー。オグロヌー属。
水飲み場は、いろいろな動物の集まってくる所。
1列に並んで、行儀よく水を飲む。
右にいるのはインパラ。

PH. F. LANE



る形をしているが，オジロヌーでは，顔の前に下がるようにのびてから上に曲がる，幅の狭い形をしている。しかし，オグロヌーと同一属にされることもある。

からだの毛色は黒っぽいが，尾の長い毛は，逆に白くなっている。オジロヌーでは，あごに長い毛があって，のどにはない。顔面には，上を向いた長い毛があって，奇妙な顔つきにみえる。

むかしは，南アフリカに広くすんでいたが，ヨーロッパ人が南アフリカに移住してきてからは，やはりこの地方にいた，シマウマの一種であるクアッガとともに，撃ち殺されたり，よい草地を家畜のヒツジやヤギに奪われて，悲劇的な運命をたどり，クアッガは絶滅したが，オジロヌーは，かろうじて生きのびた。

現在では，国立公園などで，人間の手によって，厳重に保護された結果，どうやら2000頭以上にまで，その数がふえてきている。

その肉は，筋が多くかさかさしている。



シロヒゲヌー *Gorgon taurinus albojubatus* は
オグロヌーの亜種である。
ケニア，タンザニア北部にすむ。（上）

PH. A. PICOU - AFRIQUE PHOTO



コンコニハーテベースト。ハーテベースト属。
ハーテベーストの亜種で
ケニア、タンザニアにすむ。

PH. A. VISAGE-JACANA

ハーテベースト属
Alcelaphus

ハーテベースト属は、アフリカのサバンナ地帯、すなわち、セネガル、スーダン、ソマリアから南アフリカにかけて生息している。

ハーテベーストの、長くてほっそりした頭には、雌雄ともにつのがある。頭の上の一段高くなったところからつのが出ていて、環状の節があり、長さは約25〜38センチで、途中、2、3か所で折れまがっている。耳は大きくてとがり、眼下腺(がんかせん)は、はっきりとみえる。

6〜20頭の群れをつくり、老いた雄に率いられている。この雄は、同一種類の群れのなわ張りを守るにきびしいが、シマウマや、ヌーなどがいっしょにいることは、ほとんど気にとめないふうである。ハーテベーストは、規則的に水を飲まなくてはならないので、水辺から遠くにはいかず、いつでも池の縁などにいて、沈殿した塩をなめたりしている。

今まで迫害されたことのない地域にいるハーテベーストは、恐れを知らない。しかし、多くは、狩人にねらわれた経験があるので、慎重になっている。群れが草を食べるときには、小高い所に歩哨が立ち、危険を認めれば、警報を発する。すると、群れは、前後に密接した縦列をつくって逃走を始める。走るのは非常に速い。実際にはかったところ、時速64キロであったという。

ハーテベーストは、めったに声を出さないし、めったに攻撃的にはならない。つのは、傷つけられようが追いつめられようが、武器としては使われない。敏捷さと行動性を利用して逃げるだけである。

ときとして、ハーテベーストが2頭、かれらの群れの前で、輪になってぐるぐる回るのが見られる。これは、交尾に先だつ求愛の儀式のひとつらしい。

交尾期はきまっていない。雌は年に何回か発情する。ふつう1産1子で、妊娠（にんしん）期間は、214〜242日である。雌は1対の乳頭をもつ。子どもが生まれるのは、4月と9月が比較的多いようである。寿命は11年から20年と幅がある。

ハーテベーストの肉は、レイヨウ類のなかでも、もっとも美味なもののひとつに数えられている。このハーテベースト属にはハーテベーストとコンジハーテベーストの2種があり、さらに8つの亜種があるとみられている。



ハーテベースト
Alcelaphus buselaphus

ハーテベーストは、尻に明るいぶちが、また、額、鼻づら、肩、腿には暗いぶちがある。体長は1.5〜2.0メートル、尾長は30センチほど、肩高は1.2〜1.5メートルで、尻は、肩にくらべぐっと低くなっている。

この種は、つのの形によって、8つの地理的亜種に区別される。すなわち、U字型のつのをもつ、くり色のキタハーテベースト *Alcelaphus buselaphus buselaphus* は、北アフリカにすみ、絶滅しかかっている。また、ニシハーテベースト *Alcelaphus buselaphus major* は、西アフリカに生息する。中かっこ状の長くて細いつのをもつ、チョコレート色のシグハーテベースト *Alcelaphus buselaphus swainei* は、ソマリアにすむ。トラハーテベースト *Alcelaphus buselaphus tora* は、砂色で、スーダンからアビシニアにかけてすむ。V字型のつので、赤みがかった色のジャクソンハーテベースト *Alcelaphus buselaphus jacksoni*、オレンジ色をしたレルウェルハーテベースト *Alcelaphus buselaphus lelwel*、赤茶色をしたカーマハーテベースト *Alcelaphus buselaphus caama* や、短くて中かっこ状にひろがったつのをもつ明るい淡黄褐色のコンゴニハーテベースト *Alcelaphus buselaphus cokei* である。かれらは、今では、分布域の北部と南部では少なくなっており、一部の地域では絶滅した。

もうひとつの種であるコンジハーテベースト *Alcelaphus lichtensteini* は、主として、ローデシア北部にかなり広く分布しており、背のまん中にくり色の縞があり、尾の先は黒い毛のふさになっている。一部の動物学者は、コンジハーテベーストをハーテベーストの一亜種と考えている。

ハーテベーストのからだつきは
腰が肩よりずっと低くて鈍重そうだが
走ればとても速く、敏捷である
[illegible]

ダマリスク属　*Damaliscus*

ダマリスク属はローンアンテロープ亜科のなかで、オグロヌー属、ヌー属、ハーテベースト属とともに多くの共通点をもったグループを形成している。

樹木の少ない草原性の大平野にすむ、ほっそりした四肢（しし）をもつ大型のレイヨウで、体長は1.8メートルほど、尾長約45センチ、肩高は1.2メートルに達することがあり、体重は約130キロある。頭は、額（ひたい）の幅が狭く、鼻づらが長い。約38センチあるつのは、雌雄ともにこれをそなえ、いくつかの環状の節がみられる。はじめに後方へ、先にいくにしたがって前方へ曲がっている。毛は短くて柔らかい。

数十頭がひとつの群れとなって生活している。交尾期は12月の末から2月の末にかけてである。これは1年のうちでもっともよい季節で、このころになると、若い雄たちは、群れを追われて、別に小さな群れをつくる。一方、ハーレムをもった雄は、はっきりした繁殖のためのなわ張りを形成する。このなわ張りは、排出物や、眼下腺（がんかせん）からの分泌（ぶんぴ）物を使ったり、なわ張りの境界に沿って走ったりすることで示される。この習性は、雄にのみみられる。

225～300日の妊娠（にんしん）期間を経て、雌は1頭、まれに2頭の子を生む。出産は、雨期のあとの、食糧がもっとも豊富な時期に行なわれる。

ダマリスク属の3種

ダマリスク属には、3種が区別される。すなわち、**ササビー** *Damaliscus lunatus*、**トピ** *Damaliscus korrigum*、および**ボンテボック** *Damaliscus dorcas* である。

ボンテボックは、一時は絶滅したと信じられていたが、南アフリカのいくつかの保存区に、わずかな頭数が生存している。この種は、さらに2亜種に分けられ、ケープ、トランスバール、ナタールにすむものは、ブレスボック *Damaliscus dorcas phillipsi* と呼ばれ、一方、ケープ州の西南部だけに分布が限られているものは、ボンテボック *Damaliscus dorcas dorcas* と呼ばれている。ともに、顔面と尻に白斑（はくはん）のあるのが特徴である。

トピやササビーは、東アフリカの禁猟区にまだかなりたくさんいる。樹木の少ない草原にすんでいて、丈（たけ）の高い禾本（かほん）科植物を主食にしている。枯れた植物がとくに好きなようだ。同じような状態のところにすむシマウマは、地面に一面にはえている植物を食べるので、草原をより能率的に利用しているわけである。ササビーとトピは、同一種の亜種であるとされることもある。

これらの動物に近い種にヒロラ *Beotragus hunteri* がある。これは、別名ハンターハーテベーストと呼ばれるが、ハーテベースト属よりは、ダマリスク属に近い**ヒロラ属** *Beotragus* とされる。白い尾と、鼻づらをつらぬく山形の白線が特徴になっている。



ブレスボック。ダマリスク属。
ボンテボックの亜種で、南アフリカの
ケープからトランスバールにかけてすむ。
PH. F. ERIZE





[illegible]ダマリスク属
つのは雄にも雌にもあって、60〜73セ[illegible]
[illegible]草原にすみ、禾本科植物を食べる[illegible]
PH. P. CASSELET [illegible]

[illegible]、数十頭の群れで生活している
[illegible]肩高は120〜125セ[illegible]
PH. S. TREVOR / A. DENIS PRODUCTIONS



アダックス属　*Addax*

アダックス

Addax nasomaculatus

アダックスは，アダックス属の唯一の種である。どちらかといえば，ずんぐりしたからだつきで，がんじょうな胴体をもち，肩が高く，尻はまるくなっている。体長2メートル前後，肩高約1メートル，体重は約120キロある。頭はかなり長くて幅広く，四肢(しし)はがっしりしている。

毛は短くて密生しており，かたい。つのの根もとには毛がふさふさしており，額にたれて前髪のようになっている。耳からうなじにかけては，かなり長い毛が帯状にはえており，首には短いたてがみがある。頭と首とたてがみの褐色は，その他の部分の，やや黄ばんだ白色の毛と，きわだった対照をなしている。尾はかなり長く，白と茶色のふさをもっている。

顔面には，鼻づらの中央で交差する，X字状によく目だつ白い帯が走っている。雌雄ともにつのがある。このつのは，よじれながらうず巻き状にのびていて，ほぼ，3回近くよじれたところで，ひとまわり半のらせんになっている。左右のつのの開きは，先端に近づくほど大きくなる。根もと近くでは，でこぼこしているが，つのの全長の3分の1より上の，先端に近い部分では，なめらかになっている。このつのは，かなり長く，つのの曲がりに沿ってはかると，90センチにもなる。

アダックスの分布地域は，アルジェリア，セネガル，ガンビアからサハラ砂漠を経て，スーダンにいたるまでひろがっている。かれらは，砂漠地帯にすみ，生涯の大部分を，水を飲まずに過ごし，とる水分といえば，かれらの食べる植物に含まれた，ごくわずかの水分だけである。

非常に抵抗力が強くて，サハラ砂漠の，ごくわずかな植物を求めて長い距離を歩く。こうしたきびしい生活条件にもかかわらず，かれらは，けっこう生きぬいていく。

アダックスの出産は，冬の終わりか春に行なわれる。1産で1頭しか生まない。多くのレイヨウ類と同じく，小心で臆病な動物である。重たいからだつきなので，速くは走れない。そのために，よく原住民に狩られる。アダックス狩りは，別に法律によって規制されているわけではないので，このままでいけば，絶滅の危機にさらされる日も遠くない。

アダックスは，古代エジプトの記念碑にもたびたび描かれており，そのつのはこれらの図で，神々や神官，国王などの頭を飾っている。アダックスは，ギリシャやローマの人びとにも知られていたようで，古代ローマの学者，大プリニウス(Gaius Plinius Secundus 23—79)も，アダックスのことを記している。

アダックス，アダックス属。
額にかかる前髪のような毛が特徴。
野生の状態では，砂漠地帯にすみ
ほとんど水を飲まずに生きていける。
PHP　L. MILWAUKEE JACANA

ブラックバック亜科　補足

小森　厚

本号のカラーページで扱っている、ディクディク属、オリビ属、クリップスプリンガー属は、ブラックバック亜科のうちの1つのグループであるローヤルアンテロープ族 *Neotragini* にまとめられているが、このローヤルアンテロープ族には、ベイラ属、ローヤルアンテロープ属、スニ属、スタインボック属などもはいる。学者によっては、ディクディク属とベイラ属を別のグループとして、ディクディク族 *Madoquini* に分けることもある。

以下に、これらの、本文では扱わなかった、ベイラ属、ローヤルアンテロープ属、スニ属、スタインボック属について述べてみよう。

ベイラ属　*Dorcatragus*

ベイラ *Dorcatragus megalotis* 1種のみで、からだの大きさや、つのの間に冠毛がないことなど、クリップスプリンガーに似ているが、眼下腺（がんかせん）のないことが異なっている。

ダイカーよりは、ひとまわり大きな中型のレイヨウで、体長76～86センチ、肩高50～76センチ、体重は9～11キロで、雄には、まっすぐなつのがあり、大きく幅の広い耳をもっている。

体毛は、赤みがかった灰色で、体側に暗色斑があり、腹は白い。頭部は黄褐色で、目のまわりが白い。以前は、ソマリアからエチオピアにかけての山地にすんでいたが、今では、ソマリア南東部に、わずか1000頭ほどが残っているだけといわれる。

ひづめはごく短く、高い。足うらは、部厚く、後部が幅広くて、ラクダと似た砂漠地への適応を示している。岩石の多い荒れ地に、つがいか、10頭未満までの小群で暮らし、そのなかに1，2頭の雄が見られるという。ミモザの葉やかたい草を食べる。その他の生態はよくわかっていない。

ローヤルアンテロープ属　*Neotragus*

ごく小さなレイヨウで、おもに西アフリカに分布する。ローヤルアンテロープとベーツアンテロープの2種が知られる。

ローヤルアンテロープ *Neotragus pygmaeus* は、レイヨウ類ではいちばん小さな動物で、体長50～55センチ，肩高25センチほどで、肢（あし）はきわめて細く、ひづめもごく小さい。雄だけにつのがあるが、2.5～3.8センチと小さく、毛の間からわずかに見える程度である。からだは赤褐色で、のどから腹にかけては白い。からだのわりに跳躍力がすぐれ、ひと跳びで、楽に3メートルを越える。

西アフリカ沿岸地方の、よく茂った高地林にすんでおり、夜行性なので、野生での生態はよく知られていないが、単独か、またはつがいで、目だたない暮らしを送っているものと考えられる。木の葉や果実を食べ、椰子園や落花生園を荒らすことがある。

ベーツアンテロープ *Neotragus batesi* は、からだつきがローヤルアンテロープより、わずかに大きく，肩高30センチ，



ローヤルアンテロープ

え　木村しゅうじ

体重5キロ余り、つのは根もとに節がある。尾は暗褐色で、ローヤルアンテロープのように下面が白くはない。

ナイジェリアからコンゴを経て、ウガンダにまで分布している。生態については、よくわかっていない。生息地の状態や食性は、ローヤルアンテロープに似ており、やはり夜行性で、単独かつがいでひそかに行動する。

スニ属　*Nesotragus*

スニ *Nesotragus moschatus* 1種を含み、ローヤルアンテロープに近い。眼下腺から強いじゃこうのにおいのする分泌（ぶんぴ）物を出すところから、ジャコウアンテロープの異名がある。

体長57～62センチ，肩高33～38センチ、体重8キロ内外。つのは、雄だけにあって、長さ6.5～12.5センチ、つのの基部には多くの節がある。耳の下に裸出部があり、冠毛はない。東アフリカのケニアからタンザニア、モザンビークまで分布し、ザンジバル島と、その付近の小島にもすんでいる。標高2700メートルほどのところにもみられる。

乾燥地の深いやぶか、川沿いの深いアシの茂みや川べの林にすんで、おもに葉、芽、ときに根を食べ、まれに草を食べる。ほとんど水なしで暮らしていける。単独か、つがい、ときに小群で暮らす。おもに夜明けか日暮れどきに採食に出かけ、日中はやぶの茂みのなかにひそんでいる。眼下腺から出るじゃこうのにおいは、スニのいるやぶが、そのためにわかるほどである。追われると、ウサギのような走り方で逃げる。生態については、なお、知られていない部分が多い。

スタインボック属　*Raphicerus*

東アフリカから南アフリカにかけて分布する小型のレイヨウで、オリビと同じような、まっすぐの短いつのをもっている。単独かつがいで暮らし、朝早くと日暮れどきに活動する。水から離れた地域でも暮らせるが、水があれば、よく飲む。次の3種が知られている。

スタインボック *Raphicerus campestris* は、ケニアからケープにかけて分布し、体長90センチ前後、尾長は約7.5センチ，肩高約50センチ、体重約13キロほどに達する。つのは、雄にだけあって長さ7～19センチほどである。

体毛は赤褐色で、腹は白、顔はいくぶん暗い色をしている。第2、第5指にあたる側蹄（そくてい）を欠き、ひづめは細長くとがっている。尾はごく短い。眼下腺は裸出している。

平原から半砂漠、疎林などにすみ、交尾期につがいを形成する以外は単独で暮らす。8月から3月にかけてが出産期で、ふつう1産1子であるが、2子の記録もあり、動物園では、1年に2回の出産をみることもある。産室に、ツチブタの掘った穴を使うこともある。木の葉、草、根などを食べ、乾期には、とくに根などを食べる。日中も活動している。

グリスボック *Raphicerus melanotis* は、ケープ地方に分布し、スタインボックとよく似ているが、やや小型で、体長約75センチ、尾長約5センチ，肩高約45～50センチ、体重9キロほどである。

また、スタインボックと異なって、側蹄があり、からだの背面は、赤褐色に白い毛がまじる霜降りになっている。頭を低く下げて走る点、丘陵地帯に生息する点なども、スタインボックと違う。

木の葉や芽が主食であるが、ときに果実や根を食べる。深い茂みのある荒れ地や低木林にすみつくことが多い。

シャープグリスボック *Raphicerus sharpi* は、グリスボックにごく近い種で、からだの腹の部分が白いところなど、グリスボックと違う。タンザニア南部からトランスバールにかけて分布する。低木林，川に沿った森，やぶ地、およびやぶの多い丘陵地の荒れ地などに生息する。

危険を感ずると、すばやく伏せることが知られる。また、主として草を食べるが、ときには、木の葉や果実も食べる。日中も出歩くスタインボックとは異なって、夜行性である。■



スタインボック

え　木村しゅうじ

ヒグマと2人のイノシシ 45

ヒグマとムツゴロウ

畑　正憲



畑さん，どんべえと秋田犬のグル

さまざまな職業を遍歴してきたムツゴロウ氏が，人生の半ばにして，また新たなる生計の道を発見しつつあった。

その名も猛獣使い——。

人よりずっと大きな力の強い動物を自由自在にあやつる美女。体の線を浮き立たせるきらびやかな衣装をまとい，ライオンに囲まれ，トラに囲まれているその顔には，艶麗な微笑みがある。

ブロンド。青い瞳。

少年時代，異国で見たサーカスの一場面が，ムツゴロウ氏の胸にくっきり焼きついていた。それはこの世にあってはならぬたおやかな幻影であったし，毒を含んだ白昼夢でもあった。

今，ムツゴロウ氏の容貌はかの美女とは比ぶべくもない。小屋暮らしの合間にたまさか小舟の舟端からのぞきこみ，微風に揺れる水鏡に映るおのが姿に驚いて，「出発進行！」

と，弟であるヒゲに舟出を催促するのであった。

ああ——。

ぼろは着ててもココロの錦。

憧れの猛獣使いの地歩を日毎にかためつつあったが，僕は心穏やかな日を送っていたわけではない。モーレツなライバルとしてヒゲが登場したからである。これは動物を愛育した経験がある方なら，きっとわかってくれるだろうが。

イヌでもいい。抱いて寝て，一緒に連れて回り，三度の食事を与え，完全にわがものと思っていたイヌが，家族であるなら誰にでも同じ親しさを見せるとしたら，やはり気持のいいものではない。飼主への絶対の信頼。忠実で聡明な行動。1人と1頭の間に出来る太いパイプ。それが楽しみの源なのである。

オオカミを飼ってみたいのもそのためだ。僕が知っている限りでは，オオカミの信頼と服従はたった1人に向けられるというからだ。

ヒゲだって，思いは同じであるとみえ，物資の補給などで島をあけることが多いので，閑が出来るとどんべえの部屋へ入り，

「うかうかしてると兄貴にばっかりなついちまうからなあ」

と言いながらクマと遊んだ。

運悪く霧多布で時化にぶつかり，2日ほど島にこれないと大変である。どんべえが兄貴のクマになってしまったと顔色を変えて嘆いた。

正直に告白するなら，猛獣使いとしての資質は僕よりヒゲの方が上である。ヒゲの方が僕より感情の起伏を調節出来る。それがまたシャクの種でもあった。

「ヒゲよ」

たまりかねて僕は言った。

「どんべえはどちらを主人だと思ってるだろうか」

「それは……兄貴さ」

「そう思うか」

「うん」

「証拠があるかな。たとえば，こういう動作をするから，ヒゲよりおれになついているといった風な」

「無理だな」

「わからないか」

「当たり前だ。どんべえは精神的にはまだ幼稚園の段階だから，おれと兄貴を見わけてるかどうかも怪しいものだぜ」

「チエッ」

僕は舌打ちをして抗議した。

「それなら，おれを主人だと思っているっていうのも怪しいじゃないか」

「ははは……。そうなるか」

「そうなる」

僕たちは顔を見合わせて笑った。

ヒゲとの共同生活は長い。地球上にはまだ記録して置かねばならぬことが山ほどあるので，チームを組もうと誓い合ってかなり年月が経過している。その歳月は無駄ではなく，最近では以心伝心，共同で仕事をする際には言葉が必要ではなくなった。そんな僕たちを区別するのは，どんべえにとっても難しい作業であるに違いない……僕はそう思った。

その問題に解決の糸口が見つかったのは，かつて僕の助手をつとめてくれたK君がやってきた時である。彼はスキンダイビングの名手でもあり，島のまわりを存分にもぐりまくって帰っていった。

霧が深いことを知らずに，軽装できたK君に僕はジャンパーを貸した。夏でもここは本州の高原より寒い位だ。

K君が東京へ帰った後，僕はそのジャンパーを着てクマと遊んだ。

すると，どんべえが尻ごみをして，その鼻面に深いたて皺がはしった。それからじわじわと寄ってきて，鼻孔を押し当てるようにしてジャンパーを嗅いだ。

「おれだよ。パパだよ」

呼びかけても駄目だった。かえってじれ，見たこともない荒々しい動作で咬みついた。

僕は叱った。

「どんべえ！」

彼女は部屋の隅にすっとんでいき，上目使いで僕を見た。

肩で息をしている。背の毛が逆立っている。唇は緊張時の形である。

その姿を見て僕は呟いた。

「なるほど。……そうか。そうだったのか」

「なるほど，そうか。やっぱり……。人を見分けるなんて」

もしや，と僕は考えていた。ヒグマだって人を見分けることが可能かもしれない。イヌみたいに，ネコみたいに。

イヌが人を嗅ぎわけるのは，皮膚からしみ出す脂肪酸だといわれている。他のもの，石油とか，食物とか，タバコによるよりも，ごく僅かしみ出す脂肪酸によ







島にはいろいろな動物たちが増えて
さまざまな匂いをまきちらした

左　三喜雄さんの奥さんと
　　カラスの〝九郎〟
右　エゾタヌキの子の〝マリ〟
下　ウマの母子〝ポンコ〟と〝星子〟

って人を区別しているのだ。その能力はドイツの犯罪科学研究所のレポートによると，何でも人の30万倍だそうだ。

その発見をヒゲに報告したら，彼はこう答えた。

「確かに匂いだろうな。おれも昨日そのジャンパーを着たら，どうもどんべえのようすがおかしかった。いらいらして体当たりなんかしてきやがってさ……。ガソリンか灯油がついたんだと思っていたが，そうか，他の人に貸したのか」

クマが嫌いである油の匂いなら，ジャンパーに付着する機会はいくらでもある。船外機のエンジンは混合油で始動するし，夏でも朝晩はストーブに火をつける。

油だけじゃない。魚もいじるしコンブも拾う。網にからまったカモメやウをつかまえて治療したりしている。イヌもいるしウマもいる。匂いの源はたくさんあるはずだ。

その中から，人の匂いだけを敏感に嗅ぎとるとしたら，飼育下のクマには，イヌに似た能力が具わると判断しなければならぬ。必要に迫られ，人を見分ける能力をとぎすますのだ。イヌのように，脂肪酸だと断言は出来ない。しかし，似た感じの匂い，人特有の成分に反応しているのは確かだろう。僕の匂いと他人の匂いがごっちゃになり，それでじれて，いつもとは違う行動に出たのだろう。

実験を更に進め，ヒゲとジャンパーを交換してみた。

すると，どうだ。鮮明な反応が返ってきたではないか。

どんべえは部屋の中を走り回った。ふうっとうなり，毛を逆立てた。

走り方も日頃とは違う。チョコチョコ小刻みに走るが，足の運び方がちぐはぐである。走ろうという内的な衝動の方が強く，とにかく動く足から前へ出して置こうといった感じの，せかせかした，ちぐはぐな動きである。僕たちをそれぞれ別な人間として認めていたのだ。ヒゲの匂いが僕に，僕の匂いがヒゲについている……それがどんべえをいら立たせているのだ。

僕たちは感激して，

「やはりそうだったな」

「うん。わかるのはわかってたんだ」



Ｋ君に貸したジャンパーを着たところ，どんべえは鼻面にしわをよせて尻ごみをした

「動物が見分けぬわけがないものな。へたなスタンドインは使えないってことだな」

「でも兄貴，一旦馴れたクマだったら，しばらく一緒に生活していると，スタンドインは使えるかもしれないぞ」

「どうかな。これからますますかしこくなるから，人を認識する手段がどう変わってゆくか面白いぞ。今だって，最終的には肌を舐めるまで心を許さないじゃないか」

「そうだ。こちらのゲンコツをペロリ。その瞬間，ふっと表情がなごむしね」

どんべえはヒゲとムツゴロウを，はっきり別の人間だと認識していたのである。■

十二支の話

4

寅（とら）

竹内照夫

寅は動物に当てると虎である。虎はたくましく，かつ姿体のりっぱな獣であるから，昔は生まれた子が強くりっぱに育つようにと「寅」「虎」「とら」などを名に取り入れることが少なくなかった。人名のみならず乗馬や猟犬，あるいは飼い猫まで〝虎〟と名づけることがあった。明代の『応諧録』という本に，次のような話が載っている。

ある人が飼い猫に〝虎〟と名づけた。するとある人が「虎よりも，もっと強いのは竜だ」といった。そこで〝竜〟と改名したところ，また他の人が「竜も，雲がなくては天を飛ぶことができない。雲のほうがうわてだ」すると他の人は「雲よりも風だ」「いや風よりも，これを防ぐ牆（かきね）だ」「いや牆よりも，これをかじって破る鼠だ」といいあった。ここで飼い主が気がついていった。「鼠よりも猫，すなわち，猫は〝猫〟と呼ぶのが最もいいわけだ」

寅年の生まれ　虎が強く，姿体もりっぱであることは，人間にとって生活力のたくましさを表わすための格好の比喩とされている。寅や虎の字を名に用いることが昔は多かったが，特にその人が寅年の生まれという場合は，それにちなむ命名がすこぶる多かった。男性のみならず，女性にも〝とら〟という名がかまわずに用いられている。

富士の裾野の仇討ちで有名な曽我兄弟の物語には，兄の祐成の愛人として大磯の虎御前という女性が出てくるが，この人は京都の武士の娘で，寅年寅月寅の日に生まれたので，三虎と名づけられたのであり，虎御前はその略名（御前は遊女の称）である，という話も伝わっている。また，こうした三虎そろった人の血はいたって強壮であるから，容易になおらない難病も，三虎生まれの人の血を用いれば治めることができる，という俗信もあったようである。

しかし，寅年生まれは虎にあやかって，強くて美しく育つと喜ばれる反面，性格が強烈に過ぎて運勢上必ずしも良くない，というもっともらしい判断も立てられた。特に九星術の上で〝五黄の寅〟に当たる年に生まれた女性は，ことに強烈な性質を備えて男に負けないとか，結



婚すると夫をしのいで災をなす運勢だ，などと説いた本もある。

虎と毘沙門天　江戸時代の風俗として，正月最初の寅の日は毘沙門天の初祭りとされていた。この神は七福神の一員ではあるが，元来武勇の象徴であるから，そのお使いとして虎がふさわしいと考えられたものであろう。この神は別に多聞天とも呼ばれ，仏法守護の四方の神たる四天王の１つで，北方を受け持つということである。

虎の巻　学生生活に縁の深いものの１つに〝虎の巻〟がある。むかし中国に『六韜』という題の兵書があり，それは文武竜虎豹犬の６巻からなっていた。韜とは弓の袋のことであるが，秘蔵の宝とか秘書（秘蔵の書籍）とかの意味にも用いられた。この６巻のうち，わが国では特に虎韜すなわち「虎の巻」が尊重されたらしく，そのために後世では〝珍重すべき本〟を虎の巻と呼ぶようになったのである。現在でも〝虎の巻〟は便利ちょうほうな本ではあるが，書店で積み重ねて売られているのでは，秘書というには当たらないようである。■　（中国文学者）



え　阿部隆夫

私たちの仲間　33号～48号　総 目 次



号数とページを示す数字は，誌面の下外側のものをあげた

追加と訂正

30－13　写真説明(下左)マスティフ──→マスティフあるいは断耳していない古いタイプのボクサー
30－14　写真説明　グレーハウンドの母と子──→ホイペットの母と子
30－16　写真説明　フォックスハウンドの子──→コリーの子
30－17　写真説明（上）ダックスフント──→バセット
30－18　写真説明(上中)ホイペット──→グレーハウンド
39－5　写真説明（下）クロサイ──→インドサイ
39－15　写真説明(左上下)──→（左下）左上の写真はクロサイ。クロサイ属の誤り
40－17　写真説明（左端）5行目　約乗──→躍乗
40－Ⅴ〔注1〕ひづめ断面図のうち9の線はひづめの外側までをさす。10は9のさしているところをさす。
40－Ⅴ〔注4〕ウマの骨格図のうち　腰椎は胸椎と腸骨との間をさす
41－5　左段1行目 Throughbred ──→ Thoroughbred
41－7　中段7行目 Norfolk torotter ──→ Norfolk trotter
41－8　11行目 Lipizaner→ Lippizaner

世界動物百科 33号〜48号 カラーページ総目次

ページを示す数字は，各号の誌面の下外側のものをあげた

世界動物百科 通巻48号 昭和47年2月20日発行（毎日曜日発行） 編集・発行人 大田信男 発行所 朝日新聞社 東京 大阪 北九州 名古屋 印刷・凸版印刷 定価220円



北京動物園のオオパンダ小典（シャオシン）ちゃん